



## 英語教育に関するアンケートの結果からこれからの指導へ向けて

6月24日(木)に県教委主催の生徒の英語力向上事業「英語能力測定テスト(英検IBA)研修会が開催されました。管内13中学校から代表の先生方にご出席いただき、みやぎの英語教育の現状について共有するとともに、CAN-DO リスト形式による学習到達目標を活用した「指導と評価の一体」について確認しました。遅れましたが、研修会でご回答いただいた結果をまとめてお知らせします。

### 1 CAN-DOリストの活用状況について

(複数回答可) (13校回答)

学校としてCAN-DOリストを活用した単元構想や学習評価に取り組んでいる。	10校
CAN-DOリストの活用を意識していない。	1校
1~2ヶ月以内に、学校としてCAN-DOリストを活用した授業づくりに取り組みたい。	2校
今年度中に、学校としてCAN-DOリストを活用した授業づくりに取り組みたい。	1校

多くの学校は、CAN-DO リストを活用した授業及び評価に取り組んでいます。教科書の最終扉には、学年ごとのCAN-DO リスト形式が、学習指導要領解説p136には5領域の目標が掲載されています。これらを参考にしながら、自校の生徒の実態に合っているか見直して、自校化を図りましょう。

### 2 CAN-DOリストの公表について

(複数選択可) (13校回答)

学校として学校だよりやホームページ等を使って、生徒・保護者に公表している。	1校
学校として教科開きで生徒に配布するなどして、目標を共有した。	2校
1~2ヶ月以内に、授業の中で、生徒と共有していく予定である。	4校
今年度中に、学校だよりやホームページ等を使って、生徒や保護者に公表する予定である。	4校
公表する予定はない。	0校
その他(・単元計画と共に生徒に知らせている…2校 ・検討中…2校)	4校

文部科学省の山田誠志教科調査官は、文部科学省作成動画「中学校学習指導要領・学習評価の解説 後編」(後述)の中で「授業中に生徒と目標を共有する、例えば、2年生の生徒に「2年生の終わりには、こういうことができるようになることを目標に頑張ろうな、先生もみんながそんなふうになるように授業をするから。」と言って、例えば、紙にまとめて生徒に配るとか、そういった「生徒と共有すること」も、ここでいう公表に入ります。」と述べています。こうしたことは、公表に入らないと捉えている先生もいるかもしれませんので、ここで改めて確認をしたいと思えますと言及されました。さらに、「学校のHPへ掲載することで、校区の小学校がそれを見れば、小中連携を推進することにもつながる」とも述べています。

### 3 CAN-DOリストの達成状況の把握について

(13校回答)

十分に把握している。	2校	・単元末のパフォーマンステスト ・定期テスト ・標準学力検査
おおむね把握している。	8校	・パフォーマンステスト ・単元テスト ・振り返りシート ・学習プリント ・評価規準の作成 ・ポートフォリオ作成・授業での言語活動 ・CAN-DO カードの作成と活用
あまり把握していない。	3校	

「指導と評価の一体化」の観点から、達成状況を「確実に」把握することが求められます。そのためには、評価規準の設定、パフォーマンステストやペーパーテスト等におけるルーブリックの作成が求められます。

CAN-DOリストの活用は、「指導と評価の一体化を図ること」なのです。



### 4 日頃、授業づくりで困っていること、悩んでいること、もっと知りたいこと

- ・評価の方法 ・パフォーマンステストの実践例と評価例 ・英検 IBA を活用した指導方法
- ・書くことのパフォーマンステストの方法・工夫 ・パフォーマンステストの評価方法・見取り

こちらの動画をぜひ見てください!



多くの先生方が、「評価の在り方」を取り上げています。学習指導要領では、目指す資質・能力が「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性」の3つの柱で再整理されました。これまでの評価の考え方から大きな転換が求められることが分かります。

下の表は「中学校学習指導要領 学習評価の解説 後編」(27分程度の動画) →→→→ 「指導と評価を一体化させよう」の中で紹介されています。山田教科調査官が、この表をもとに「評価の在り方」について分かりやすく説明しています。



	聞くこと	読むこと	話すこと (やり取り)	話すこと (発表)	書くこと
知識及び理解	内容そのもの		英語使用の正確さ		
思考力・判断力 表現力等	目的,場面,状況に応じて必要な情報,概要,要点		英語使用の適切さ		
主体的に学習に 取り組む態度	言語活動で表出された態度				

併せて、英検協会 英語情報 Web「学習指導と評価について」(8分程度の動画) も見ていただくと理解が深まります。また、前述の「中学校学習指導要領 学習評価の解説」前編(24分程度の動画) もぜひご覧ください。

パフォーマンステストの事例・評価方法については、「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料にも掲載されています。すでに活用されている先生も多いと思いますが、パフォーマンステストに至るまでの指導から評価例、事後指導まで事例を基に紹介されています。→



さて、ここで次の例題をご覧ください。違いは何でしょう?

**例題1** 次の日本語に合うように、( )に適語を書きなさい。

彼は由紀とバドミントンをしています。 He ( ) ( ) badminton with Yuki.

**例題2** 次の会話文を読んで、空欄に入る最も適切なものを選択肢から1つ選びなさい

A: Where is Mike ?  
 B: Over there. He ( ) badminton with Yuki.  
 A: I see. Thank you.

選択肢: ア plays イ is playing ウ played

「指導と評価の一体化」のための参考資料には、例題2のような問題や採点の方法等についても書かれています。



どちらも知識(現在進行形を用いた文に関する英語の特徴やきまりを理解しているか)を問う問題です。さて、文脈を通して考えさせる問題はどちらでしょうか。

「知識の暗記」から「生きた知識」とするためには、「文脈で考える」ことの習慣化が大事です。このことを意識することが「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる」ことにもつながります。

～おわりに～

CAN-DO リスト形式の学習到達目標を生徒と共有するということは、評価方法も共有することです。定期テストやパフォーマンステストにつながる一貫した評価方法について、普段の授業から生徒と共に確認していくことが大切です。そのためには、まず、単元テスト、パフォーマンステストの内容(身に付けさせたい資質・能力)を明確にし、その目標に向かう道筋がみえるような「バックワードデザイン」による単元構想、そして評価規準の設定が欠かせません。さらに、生徒一人一人の達成度を見取るために、パフォーマンステスト及びペーパーテスト等を行う際には、ルーブリックを生徒と共有することも考えられます。生徒は、「何ができるようになればいいのか」「どのように学習を進めればいいのか」がはっきりすれば、自ら前に進もうとするのではないのでしょうか。